

# ORIENTE

EX ORIENTE LUX -光は東方より-



古代オリエント博物館情報誌 オリエンテ

No.44

2012年2月

収蔵品紹介「アンフォラ」／乳の流れる地「西アジア」

インダス文明の遺跡を掘る／あなたの知らないハンムラビ法典

ウズベキスタンの文化財保護事情／展覧会案内

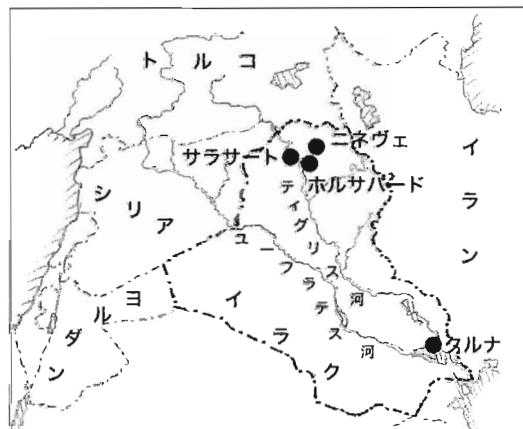
# クルナの水没遺物引き揚げ調査1971

イラクのティグリス河とユーフラテス河の合流点にクルナ町がある。川べりで生活し、自生する葦を利用して家や舟、敷物などを作り、マーシュ（沼沢）アラブとよばれる人々が住む（写真左）。かつてイラクでの英仏両国による古代遺物分捕り合戦のさなか、1855年にフランス人ヴィクトル・プラースがアッシャリアの都ホルサバード（古代名ドゥル・シャルルキーン）やクンジュク（古代名ニネヴェ）で発掘したイラクの古代遺物をフランスに持ち帰ろうとティグリス河を筏で下り、クルナ付近で遺物は水中に没してしまう大事件がおこった。当時フランス隊がメソポタミアで手に入れた遺物のほとんど全部と寄付金のお礼としてプロシア政府に贈呈する遺物などを満載した4隻の革袋筏と1隻の大型ボートであった。そのうち沈んだのは革袋筏2隻と大型ボート1隻で、1855年5月23日のことであった。

東京大学イラクイラン遺跡調査団が初めてイラクに鍼を入れたのがその100年後の1956年で北部のテル・サラサートであった（裏表紙写真）。団長であった江上波夫（古代オリエント博物館初代館長）にクルナの引き揚げ調査が持ちかけられ、中日新聞、日本オリエント学会とイラク考古局により協定が成立し、1971年9月から現地入りし、10月から翌年1月末まで調査が行われた。水上での調査は国際航業が音波調査により水面下を探り、潜水しての確認作業は深田サルベージが担当した。100年を経て河の流路が変わったと予想されてはいたが、4ヶ月間の夢を追う作業は結局成果なく終わった。表紙写真は40年前当時、昔の映画で見るような潜水夫やむなしく底をさらう日本の船である。かたや水辺のクルナの女性たちの

のどかな風景である。こんな昔話を春の古代メソポタミア展開催にあたり、思い出しご紹介する。

表紙、裏表紙いずれも三枝朝四郎氏（1901—1992年）の写真である。三枝氏は東京大学のイラクやイランの調査にカメラマンとして参加し、私財も投じて膨大な写真記録を残している。その写真の一部は古代オリエント博物館に寄贈され、今なお活用させていただきつつ三枝さんの技術に感心させられている。かつ、古代オリエント博物館に多額のご寄付をいただいたことも記して、故人に深く感謝申しあげる次第である。（研究部長 石田恵子）



## 文献

- 「聖書伝説と粘土板文明」江上波夫著作集5  
1984年 平凡社 203-204頁
- 「ティグリス=ユーフラテス文明展」  
1974年 東京国立博物館、東京新聞、中日新聞
- 「アジアの人間と遺跡 三枝朝四郎50年の写真記録」  
1971年 光村推古書院

● No.44 FEB. 2012 ● 収蔵品紹介「アンフォラ」 ..... 長谷川 修一 ..... 1

## 目次 Contents

6月友の会講演 乳の流れる地「西アジア」.....	三宅 裕 ..... 5
8月友の会講演 インダス文明の遺跡を掘る .....	上杉 彰紀 ..... 11
10月友の会講演 あなたの知らないハンムラビ法典 .....	中田 一郎 ..... 17
11月友の会講演 ウズベキスタンの文化財保護事情 ..... アリプトジャノフ・オタベック .....	23
展覧会案内 .....	30

# インダス文明の遺跡を掘る

2011/8/13  
友の会  
講演録



総合地球環境学研究所 外来研究員  
上杉 彰紀

## インダス文明とは

世界四大文明の一つに数えられるインダス文明とはどのような特徴をもっているのでしょうか。考古資料で直接的に把握できる指標をあげると、その広域性（図1）、都市の存在（図2・3）、文字の使用、度量衡の統一、交易ネットワークの広がりを確認することができます。これらの証拠から当時の社会を推測してみると、都市が地域社会の拠点となり、地域間を結びつけるとともに、地域間の交流を円滑にする仕組みが存在した社会と評価することができます。これも間接的な推測にとどまるものの、都市社会と広域交易を管理・統制するなにがしかの権力が存在した可能性も十分にあるといえます。

こうした考古資料に直接的、間接的にみられる証拠は、インダス文明にとどまるものではありません。メソポタミア、エジプト、中国、マヤなど、古代文明が栄えた地域では、程度の差こそあれ、こうした都市型広域社会が存在

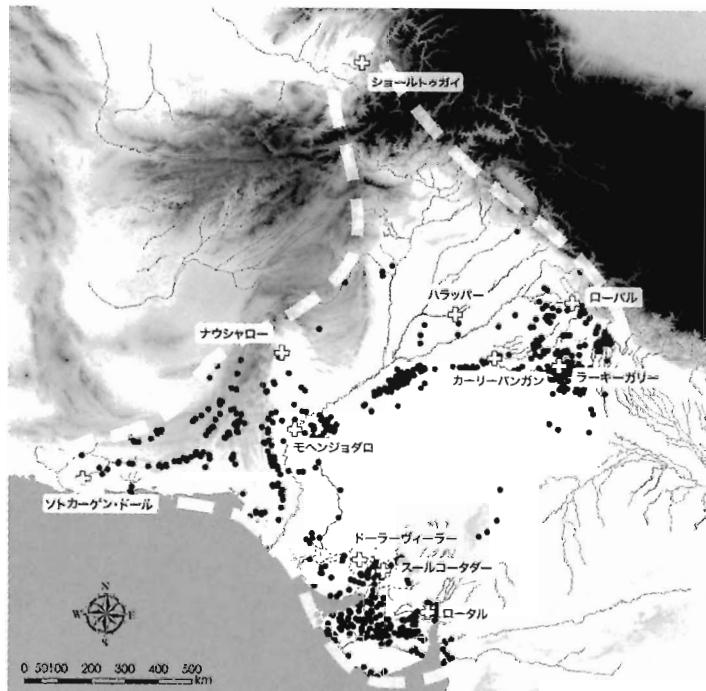


図1. インダス文明の範囲（白抜きの+は主要な都市・拠点遺跡）

していましたことが知られています。逆に言えば、こうした証拠がみられるからこそ、私たちは古代文明の



図2. シンド地方の大都市 モヘンジョダロ遺跡



図3. グジャラート地方の交易都市 ドーラーヴィーラー遺跡

存在を認めることができます。

## インダス文明圏内の多様性

広大な地域が一つの文明社会にまとめあげられている一方で、文明圏内には自然・文化的多様性が存在していました。広域統合と多様性という対照をなす特徴がインダス文明社会の特質であるということができます。

まず、自然環境の多様性という点からみると、インダス文明に含まれた地域には山岳部から丘陵、沖積平野までさまざまな地形環境が含まれ、同時に極度の乾燥地帯から比較的降水量の多い地域が存在しています。利用可能な土壌と水量によって栽培可能な作物は変化し、農業生産力は大きく異なってきます。逆に山岳部や丘陵地帯は格好の放牧地を提供します。食料生産以外の資源でみてみても、沖積平野と山岳・丘陵地帯で大きく異なっており、山岳・丘陵地帯には豊富な岩石・鉱物資源が埋蔵されており、さまざまな工芸品（図4）を製作するための素材を供給していました。



図4. インダス文明の代表的な遺物（ファルマーナ遺跡出土。1・2: 印章、3: 封泥、4・5: 紅玉髓製玉、6: ラピスラズリ製玉、7: 凍石製玉、8: 玛瑙製玉、9: 金製品、10: 碧玉製玉、11・12: 石製収穫具、13: 銅製槍先。縮尺不同）

自然環境の多様性は当然のことながらそれぞれの地域に住む人々の生活や文化にも大きな影響を与えることになります。乾燥地帯であれば、比較的水の得られる場所に人々の生活の場あるいは文化空間が限られるのに対し、沖積平野であれば氾濫原を除いていたるところに集落と耕作地が広がることが可能です。

現在知られているインダス文明前後の時代の遺跡の分布を概観すると、乾燥性高原地帯と湿潤性平原地帯で遺跡の分布は大きく異なっています。高原地帯では山間の細長く伸びた谷地に遺跡が線的に分布するのに対し、平原地帯では面的に遺跡が分布しています。同時にそれぞれの地域に展開した文化においても、大きく異なる文化要素の存在を認めることができます。土器を例にとってみると、西のパローチスター地方に広がる乾燥地帯では多様な動物・植物・幾何学の文様を描いた彩文土器が通時に出現するのに対し（図5）、東のインダス平原ではシンプルなデザインを特徴とする土器が広がっています。この違いは先インダス文明期からポスト・インダス文明期にかけて一貫してみられる違いです。



図5. パローチスター高原の彩文土器（1・2: 先インダス文明期のナーレ式土器、3・4: インダス文明期のクッリ式土器。古代オリエント博物館所蔵。縮尺不同）

## インダス文明はどのようにしてつくられたか

こうした本来異なる自然環境の中で各地に形作られてきた地域社会・文化をまとめあげたのがハラッパー文化です。このハラッパー文化はパンジャーブ地方あるいはシンド地方で成立した一地方文化だったのですが、前2600年頃以降に周辺地域へと拡散していきます。ハラッパー文化の要素（図4）は北はアフガニスタン北部、西はパローチスター高原、東はガッガル平原、南はシンド地方にまで及んでおり、その範囲は東西1600km、南北1800kmと広大です（P11. 図1）。ハラッパー文化がなぜこのような広大な地域に拡散することになったのかよく

わかつていませんが、ハラッパー文化の拡散によって各地が結びつけられ、文明社会が形成されることになりました。ただし、注意しておかなければならぬのは、ハラッパー文化の出現以前、すなわち文明期以前にも各地の間では交流があったことです。ハラッパー文化の拡散は文明期以前の地域間の交流関係を基盤にするとともに、それを再編するかたちで起こったと考えられるのです。

ハラッパー文化の拡散によって広大な地域が一つの文明社会の仕組みの中に取り込まれたとはいっても、文明期以前から各地で発達してきた地域文化の伝統は温存されたことがわかつています。広域型のハラッパー文化と各地の在地文化の関係こそがインダス文明社会を形作る二大要素であり、インダス文明社会のダイナミズムを生み出しているということができます。700～800年続いたといわれるインダス文明社会の歴史とその意義を考える上で、この関係がきわめて大きな意味を有していると考えられます。

### ガッガル平原における調査事例からみえること

ここで少し視点を変えて筆者がこの数年調査を続けているガッガル平原の様相についてみてみることにしましょう（図6）。ガッガル平原はインダス文明社会の東北部に広がる地域で、ガッガル川とその支流によって形成された沖積平野です。西のインダス水系とは異なり、ガッガル水系に含まれる河川はヒマーラヤ山脈の本体ではなく、その前縁部にあるシワーリク丘陵を水源としています。これは流量の違いを意味しており、ガッガル平原に流下する水量はインダス平原に比べるときわめて限られています。結果的に河川によってつくられる氾濫原はインダス平原よりも狭い上に、洪水の頻度は低く、規模も小さいという特徴があります。

この地域では先インダス文明期から多くの遺跡が分布し、人々の生活の場となっていました。先文明期の人々の暮らしについてはまだよくわかつていませんが、西のパンジャーブ地方やシンド地方とは異なる在地の土器様式が発達し、広い範囲に分布していました。その一方で、パンジャーブ地方の土器もわずかながらみつかっており、先文明期の段階で

ガッガル地方とパンジャーブ地方の間で交流があつたことがわかります。前2500年頃になると、パンジャーブ地方からハラッパー文化が波及します。ここで在地の文化とハラッパー文化の共存構造が生まれることになったのです。

ガッガル地方最大の文明期の遺跡はラーキーガリ遺跡で、その規模は100ヘクタール前後に及びます。大規模な都市と考えられますが、発掘調査の成果は十分に公表されておらず、よくわからないところが多いのが現状です。この遺跡から東南に30kmほどのところにファルマーナ遺跡があり、2006年～2008年度にかけて京都にある総合地球環境学研究所のインダス・プロジェクトが中心となって発掘調査が行われました。筆者も調査に参加しましたが、この遺跡は18ヘクタールほどの大きさをもち、規模

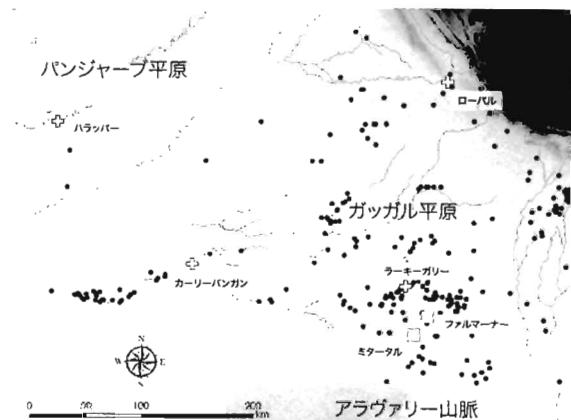


図6. ガッガル平原のインダス文明期の遺跡



図7. ファルマーナ遺跡の日干煉瓦積建物群平面図



図8. フアルマーナー遺跡の日干煉瓦積建物群



図9. フアルマーナー遺跡の台所跡

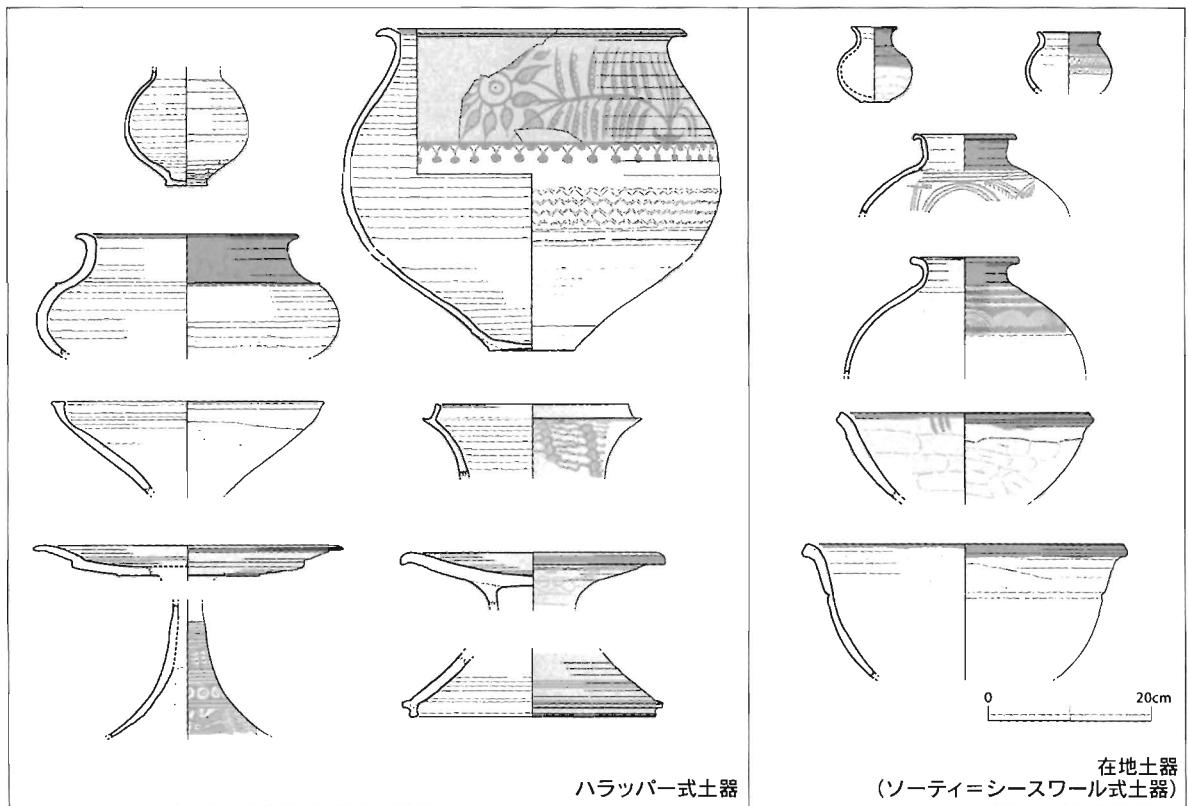


図10. フアルマーナー遺跡出土の土器

だけでみればラーキーガリーに次ぐ遺跡です。

発掘調査の結果、インダス文明前半期（前2500～前2300年頃）の日干煉瓦積建物群が発見されました（P13. 図7、8）。個々の建物は中庭と部屋列から構成されており、そうした建物が大小の街路と組み合わされて配置されています。その構成・配置はモヘンジョダロ遺跡の居住域と共通しています。建物の中には浴室や台所（図9）も確認でき、建物の中

から外へ続く排水溝やさらには居住域外へと伸びる排水路もみつかっています。こうした特徴はこのファルマーナー遺跡の居住域が多くの方が集住する都市的生活様式をもつものであったことを示しています。

出土遺物には、ハラッパー式土器、石製印章、石製装身具、石製収穫具など、ハラッパー文化に特徴的な遺物が含まれるとともに（P12. 図4）、在地の土器も大量に出土しました。ハラッパー式土器と在

地の土器は形、装飾、作り方などあらゆる点で異なっていますが（P14. 図10）、生活の中では一緒に用いられていたようです。ハラッパー式土器と地元の土器がどのように生産され、どのように集落に供給されていたのかよくわかつていませんが、ハラッパー文化の要素と地元の要素が共存する構造を見てとることができます。

また、石製品に用いられたさまざまな石材は、砂岩を除くとガッガル平原近辺で調達可能なものではなく、1000km近くも離れた産地から持ち込まれたものです。装身具の一部はファルマーナー遺跡でも加工されていたことが明らかとなりましたが、多くは遠隔地で製作されたものです。装身具の製作工房はグジャラート地方やシンド地方、あるいはパンジヤープ地方など各地に存在していたことがわかつていますが、製品はインダス文明圏内のみならず、メソポタミアやアラビア湾岸にも輸出されていたことが知られています。こうした広域交易ネットワーク



図11. ファルマーナー遺跡の墓（第20号墓）



図12. ファルマーナー遺跡の墓で出土した土器（第39号墓）

もまた、インダス文明社会の特質を考える上で重要な手掛かりということができます。

また、ファルマーナー遺跡では集落から西北西に900mほどのところで墓地も発見されました。56基の墓を発掘しましたが（図11、12）、いずれもインダス文明期のもので、ハラッパー式土器と在地の土器が副葬されていました。在地の土器の中にはハラッパー式土器を模倣したものもあり、両者が単に揃って副葬されているだけではなく、生産レベルもしくは消費レベルで相互に交流があったことを示しています。

2011年5月から開始したミターナル遺跡はファルマーナー遺跡から西南に20kmほどのところにある遺跡です。（図13）ガッガル平原の南縁部に位置する遺跡で、さらに南にはアラヴァリー山脈が広がっています。まだ調査を始めたばかりですが、この遺跡はインダス文明後半期からポスト・インダス文明期にかけての遺跡であることが明らかになってきています。

興味深いのは、16ヘクタール前後を測るこの遺跡では、ポスト・インダス文明期にもかなり広範に人々が暮らしていたことです。インダス文明の衰退とは、既存の都市の衰退、小規模村落の増加、文字が用いられなくなる、交易ネットワークの変化といった現象によって把握することができますが、ミターナル遺跡は文明社会が衰退していく中で依然として地域の拠点として機能していた可能性があります。

都市社会あるいは文明社会の衰退はきわめて複雑な社会変容の過程を経ていることが想像されますが、これまでインダス文明の衰退といつてもその過程が具体的に明らかにされているわけではありません



図13. ミターナル遺跡の日干燥瓦積建物群

んでした。ミターテル遺跡はそうした文明の衰退が広域レベルあるいはローカルレベルでどのように進行したいといったのか考える上で多くの手掛かりを与えてくれそうです。

## インダス文明の歴史的意義

最後にインダス文明がもつ歴史的意義について考えてみたいと思います。その歴史的意義を考えるとき、もっとも重要なのは時間軸と空間軸の中にインダス文明という歴史事象を正しく位置づけることでしょう。インダス文明が発見された当初、それはメソポタミアの強い影響下で誕生したと考えられていました。1950年代以降、調査が進むにつれて、インダス文明以前の文化的展開が明らかになり、インダス文明の成立過程がおぼろげながら明らかになってきました。その成果を踏まえて、インダス文明はインダス川流域およびその周辺地域における社会・文化的発展を基盤として成立したものであり、メソポタミアからの影響はほとんどないと主張されるようになりました。この2つの考え方を伝播説と自生説として大別すると、近年は自生説が優位となっています。

しかしながら、文明という高度に複雑な歴史事象を明らかにするには、さまざまな視点が求められることはいうまでもありません。実際、インダス文明の西縁部を構成するバローチスタン高原は西のイラン高原との関わりが強く、それはインダス文明期においても同様です。イラン高原との関わりは先文明期においてはインダス平原にも確認できます。地続きの世界では隣接地域間で社会・文化的交流が不斷に行われており、そうしたネットワークの中で、インダス平原もまた直接的にせよ間接的にせよ西方とのつながりを有していたことは確かです。

その一方で、インダス平原およびその周辺部の各地でインダス文明期をさかのばる、はるか以前から地域ごとの社会と文化伝統が形成されていたことも事実で、こうした地域社会・文化がインダス文明社会の成立に大きな役割を果たしたことはすでに述べたところです。インダス文明の中核を担ったハラッパー文化もまたインダス平原で成立した社会・文化でした。

地域社会と地域間交流は相互に深く連動したものであり、文明社会の誕生はその相互関係に基づき置いていると考えられます。地域間交流にもさまざまなレベルが存在しており、身近な日常的人間関係にはじまるレベルから、集落間の関係、都市間の関係、交易関係、政治的関係などさまざまです。インダス文明以前から各地で展開した地域社会を狭域交流ネットワーク、ハラッパー文化によって結びつけられたインダス文明社会を中域交流ネットワーク、インダス川流域と西のイラン、メソポタミア、アラビア湾岸地域との関係を広域交流ネットワークと整理すれば、それらは重層的な関係のもとで、インダス文明社会にさまざまな影響を及ぼしたと考えられます。伝播説か自生説かという単純化された観点ではなく、諸々の交流ネットワークレベルで検討を積み重ね、インダス文明の成立から衰退にいたる歴史の全体を描き出していく必要があるでしょう。

一方で、インダス文明は南アジアの歴史のなかでどのように位置づけられるでしょうか。インダス文明の時代に発達した都市社会は前1900年頃に衰退しますが、その後の歴史と無関係というわけではありません。都市を失い、集落の分布は東のガッガル平原からガンガー（ガンジス）平原、あるいはグジャラート地方からインド半島部へと移動していきますが、インダス文明の時代に生まれたさまざまな文化要素が引き継がれていくことになりました。前1500年頃になると、インダス文明の伝統とは異なる要素が各地で出現してきますが、例えば交通路のように南アジア世界の景観を形作る重要な要素は、その後の歴史の中でも重要な役割を果たすことになりました。

歴史の展開は表面にみえるものだけでなく、地域社会の中に根ざした伝統や風土といった歴史の中で重層的に積み上げられていくものが重要な意味をもつことがあります。インダス文明の歴史的意義を評価する試みは今後も続けていく必要がありますが、南アジアの歴史の中でけっして孤立した過去のできごとではなく、南アジア世界が形成されていく一つの歴史的段階として評価することが重要と考えています。